



龍ヶ峠と伊勢古道

2025年8月2日版

1 龍ヶ峠と伊勢古道

古くから、三重県度会郡南伊勢町の五ヶ所浦から切原峠、伊勢市矢持町床ノ木(いすのき)、上村(かみむら)、菖蒲(しょうぶ)、龍ヶ峠(たつがとうげ)、(伊勢市宇治今在家町)高麗広(こうらいびろ)を経て伊勢神宮・内宮(皇大神宮、こうたいじんぐう)に至る街道があった。菖蒲(久昌寺)ー龍ヶ峠ー高麗広ー内宮のルートは、近年「伊勢古道」と呼ばれるようになった(資料1)。

(1)「龍ヶ峠」とその周辺の歴史

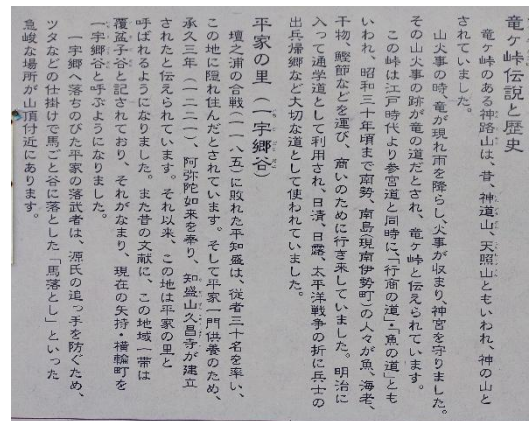
伊勢市の矢持地区には多くの平家伝説が語り伝えられ、「平家の里」として知られている。平清盛の四男で、武将として有名な平知盛(たいらのとももり)によって創建されたと伝えられている久昌寺(きゅうしょうじ、写真①)が矢持町菖蒲にある。

昔の文献によると、矢持町、横輪町一帯は覆盆子谷(いちごだに)と記載されている。これがなまって、一字郷谷(いちうごうだに)となった。(久昌寺近くの解説案内板(資料2、写真②))

「壇ノ浦の戦い」で源氏に敗れた平知盛は自害したとされている。しかし、確かな証拠はなく、伝説(江戸時代の資料3)によると、平家の再興を願う知盛は従者30人とともに落ち延び、伊勢平氏の縁により前山にしばらく隠れ住んだ。しかし、平家残党の搜索の任務を負った北条時政による探索が厳しくなったため、さらに前山から険しい鷲嶺を越え矢持町周辺に、再起を図るために隠れ住んだと伝えられている。(「久昌寺と平知盛」：後述。)



①久昌寺

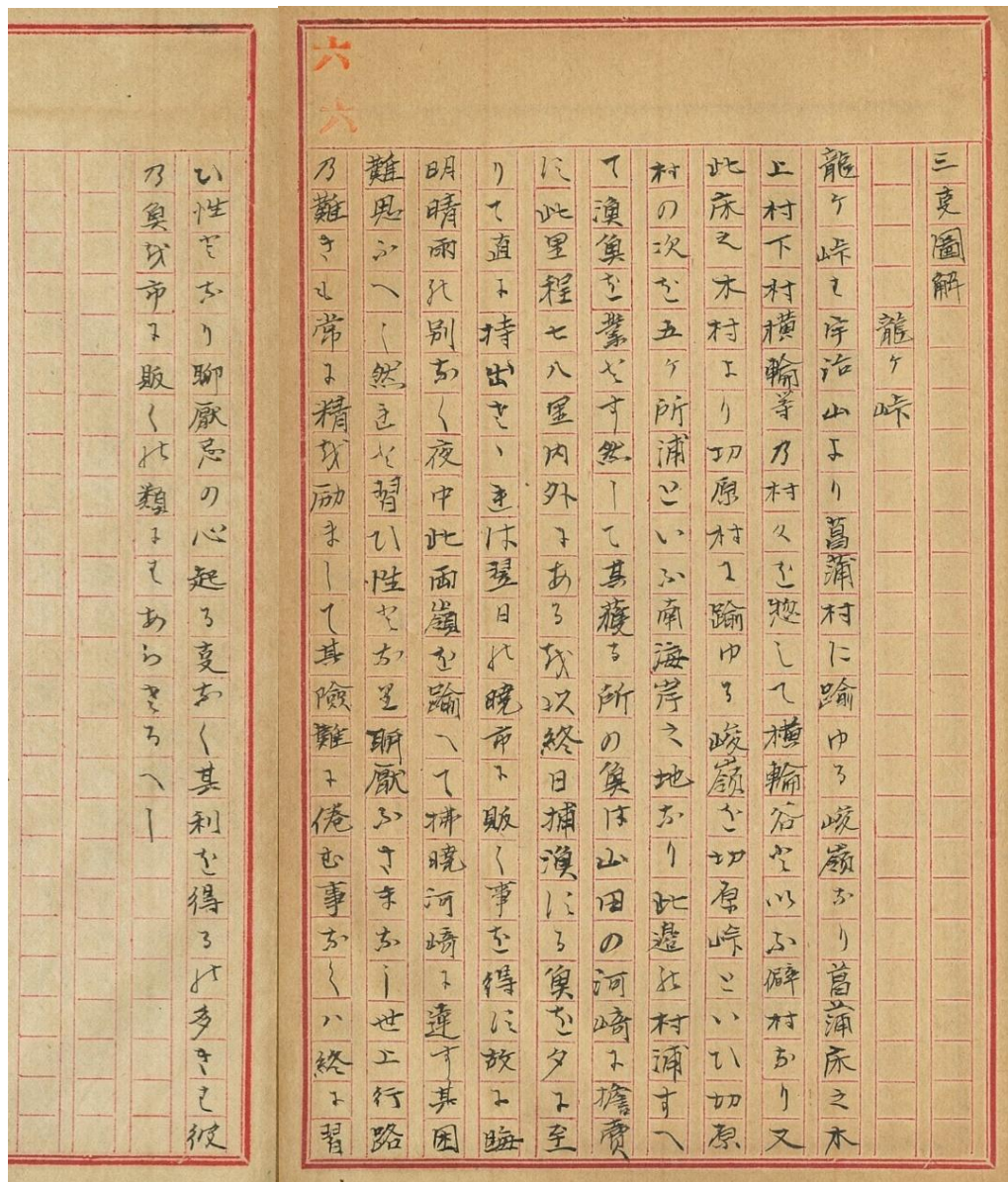


②解説案内板(龍ヶ峠伝説と歴史、平家の里)

この地域の人々にとって、明治の中頃まで龍ヶ峠は五ヶ所から内宮(皇大神宮)に抜ける交通の要所であった(「龍ヶ峠を守る会」の中瀬誠一氏による)。この街道は伊勢神宮参拝だけでなく、生活のための山越えの峠道でもあった。龍ヶ峠から内宮方面の森林一帯は、「宮域林」(伊勢神宮が所有、参考①)で、神路山(かみじやま、参考②)と呼ばれている。

神宮参拝のために紀州の人々が船で来ると、志摩半島を廻って伊勢の大湊方面に入るより、五ヶ所浦に入り陸路で切原峠、龍ヶ峠を越えて内宮の裏に入ったほうが時間短縮となり、より良いルートであった(資料4、5)。

矢持町菖蒲にある久昌寺(きゅうしょうじ、写真①)近くの解説案内板(資料2、写真②)によると、この峠は江戸時代より「行商の道」、「魚の道」ともいわれ、昭和30年頃まで南勢町、南島町(現南伊勢町)の人々が魚、干物などを運び、商いのために行き来していた。『沼木村(誌)』(資料6、次ページの写真③)に、「龍ヶ峠」についての記載がある。これによると、五ヶ所浦から龍ヶ峠を経て、宇治を通り、山田の河崎に至る街道は「魚の道」でもあったことが分かる。(内宮のある地区は宇治、外宮のある地区は山田と呼ばれてきた。河崎は江戸時代には問屋街として知られ、山田最大の商業地区であった。1955年(昭和30年)にそれまでの「宇治山田市」は「伊勢市」に名称が変更された。)



③沼木村誌(資料6)の「龍ヶ峠」記載ページ(江戸時代／明治時代の資料を転記したものか？変体仮名も使用されている。
出典については後述の資料6参照)

「龍ヶ峠」(要約)

龍ヶ峠は宇治にある山から菖蒲村へ越える険しい嶺である。菖蒲・床ノ木・上村・下村・横輪などの村々はまとめて横輪谷と呼ばれるひなびた村々である。また、床ノ木村から険しい切原峠を越えると切原村があり、次に南の海岸に五ヶ所浦がある。このあたりの村々は漁業を仕事としている。獲った魚は山田の河崎まで担いで運んで売る。7・8里(片道約30km)の道のりがあるが、獲った魚を夕方すぐに運べば翌日の朝市で販売できるようになる。よって、昼夜や晴雨に拘わらず、夜中に2つの峠を越えて、明け方に河崎に着くというその困難を想像すべきである。しかし、行程が困難であっても常に精を出すことにより仕事は習慣となり、嫌って避けるという心も起こらず、多くの利益が得られるので獲った魚を市で販売するというに比べるものはない。

(資料5によると)運搬には荷車(大八車)も使われ、馬も通っていた。久昌寺から龍ヶ峠の途中に茶屋があった(後述の「茶屋跡」参照)。また、矢持の人々の中には、龍ヶ峠を越えて高麗広で田を作っていた人がいた。

しかし、昭和30年代になると、近隣の道路が整備されることによって龍ヶ峠越えの道は廃れ、1984年(昭和59年)に南勢町－伊勢間のサニーロードが開通すると、龍ヶ峠を越える人は全くなりなくなった(資料5)。



伊勢市と地元は久昌寺—龍ヶ峠—高麗広(内宮側)のルート(「伊勢古道」の一部)について協議を重ね、平成19年(2007年)に伊勢市が歩きやすい道として再整備した(資料7)。内宮側から龍ヶ峠への登り口は内宮・高麗広を通る三重県道12号伊勢南勢線(別称:五ヶ所街道)の仙人下橋に近くある(案内の標識あり、写真④)。

その後、「伊勢古道」の龍ヶ峠から内宮方面の神宮林側の区間は、大雨などによる山道の破損のため、残念ながら現在は通行止めになっている(写真⑤)。

「伊勢古道」：菖蒲・久昌寺—龍ヶ峠—高麗広—内宮・宇治橋 (全体で約8.8km)

久昌寺前(標高96m)—2.9km—龍ヶ峠(標高333m)

—2.7km—高麗広・仙人下橋(せんにんしたはし)近く(標高約50m)—3.2km—内宮・宇治橋

久昌寺前の案内塔では2里。1里＝約3.9kmより2里＝約7.8km (注:龍ヶ峠—仙人下橋は現在通行止め)

現在のルートは「久昌寺⇄龍ヶ峠」(標高差約240m)の往復で、歩きやすくハイキングに適している。(後述の「(3) 久昌寺—龍ヶ峠—仙人下橋にある旧跡などのスポット」で詳しく解説)「伊勢古道」は久昌寺から菖蒲川(参考③)沿いに進む。途中の茶屋口までは、軽自動車なら道はかなり狭いが通行可能である。また、久昌寺から砂防ダムまではアスファルト舗装がされている。この地区はシカ、サルなどの野生動物が多数生息し、獣害も多い。寒くない時期に山に入る時は、マダニやヒルの被害が心配されるので十分な対策が必要である。



④県道12号線からの登り口(仙人下橋近く)
龍ヶ峠(頂上)2.7km、矢持町久昌寺5.6kmの記載がある



⑤現在は通行止め(2025年3月現在)
(「これより神宮宮域林です」の標識がある)

(2) 「龍」と「竜」および「龍ヶ峠」の名の由来

「たつがとうげ」の表記については、①龍ヶ峠、②竜ヶ峠、③辰ヶ峠、④龍が嶺(りゅうがみね) がある。

現在、「竜ヶ峠」が一般的に使われているが、**新字体の「竜」ではなく、旧字体の「龍」の使用を強く推奨したい。**

以下にその理由を説明する。「竜」は西洋のドラゴンであり、「龍」は東洋の水の神と繋がっている。「竜」はヨーロッパの絵画などでは、「聖ゲオルギオスと竜(ドラゴン)」(Saint George and the Dragon)のように退治されるべき悪の象徴として描かれてきた。一方、仏教の法華経の中では、「龍」は八大龍王として出ている。八大龍王は仏法の守護の役割を持つ。日本の寺院では修行の場である法堂(はっとう)・講堂などに龍の天井画が描かれてきた(京都の建仁寺、妙心寺、天龍寺など多数)。「龍」は、神社では「龍神」として、水の神様、雨乞いの神様として祀られてきた。このように、「龍」は善、「竜」は悪のイメージがあり、全く逆である。したがって、**この解説では、「龍ヶ峠」と表記している。**公文書である『沼木村誌』では、前述の引用以外でも「龍ヶ峠」が使われていた。

伊勢市および周辺に八大龍王を祀る社寺がある。朝熊ヶ岳(あさまがだけ、朝熊山ともいう、555m)頂上付近に金剛證寺(臨済宗南禅寺派)の八大龍王社があり、伝説はここで龍が天に昇ったという。金剛証寺は皇大神宮の鬼門(北東)を守り、八大龍王社は鬼門を塞ぐといわれている。切原峠から剣峠(つるぎとうげ)に至る稜線にあった飯盛寺(いいもりじ、資料8)の跡に八大龍王神社がある。飯盛寺は皇大神宮の裏鬼門(南西)を守るために、この地に創建されたといわれている。他に、伊勢市にある松尾観音寺は龍神伝説で有名である。

「龍」は空想上の生き物である。「龍」は、頭はラクダ、目は鬼の目、角は鹿、首は蛇、腹はみずち(蛇の一種)、うろこは魚、爪は鷹、足は虎、耳は牛で、9種類の動物で合成され、神的な力を持った生き物として描かれてきた(資料9)。

「龍ヶ峠」の名の由来(伝説を含む)はいくつかある。

- (1)伝説によると、昔、山火事の時、龍が現れ天に舞い昇り、雨を降らして火事を治め、伊勢神宮を守った。その山火事の跡が龍の道とされ、「龍ヶ峠」の名の由来となった(資料1、2)。まさに善のイメージ通りである。
 - (2)辰の日(日の十二支が辰に当たる日で、12日ごとに1回ある)の辰の刻(午前7時～9時)に「待合い岩」(龍ヶ峠―仙人下橋の途中)で市があった。このことから「辰ヶ峠」と呼ばれるようになった。一宇郷や南伊勢の産物と山田(今の伊勢市)の品を物々交換した。また、見合いの場所でもあった。(資料5および中瀬誠一氏談)
- 「龍が嶺(りゅうがみね)」が江戸末期の伊勢神宮参拝のガイドブック『伊勢参宮名所図会』(いせさんぐうめいしよずえ)に記載されている(資料10)。

「…いたれば龍が嶺 切原が嶺などを 越(こえ)て志州の 村邑(そんゆう)あり 此辺(このへん)御贄の 漁人(ぎょじん)あり」

志州は志摩国(しまのくに)の別称、村邑は村落、御贄(みにえ/おんべ)は神または天皇に供する食物、漁人は漁師。江戸時代に「伊勢古道」が志摩国から伊勢神宮に供え物(御贄)を運ぶ道でもあったことが分かる。

(3) 久昌寺－龍ヶ峠－仙人下橋にある旧跡などのスポット

以下の解説で特に断っていないものは、伊勢市が現地に設置した解説案内板を参考になっている。

- ①高切間(たかぎりま)の石橋: (写真⑥)、自然石の野面積(み) (のづらづみ、参考④)の石橋。高切間の山頂に続く谷に架けられた。荷車(大八車)を通行させるために村人の手によって造られた。
- ②炭焼き窯: 菖蒲川に架かる覆盆子(ふぼんじ)橋(写真⑦)を渡りすぐ左にある。平家の里に伝わる炭焼きは一宇郷木炭(矢持木炭)と呼ばれ、江戸時代から生活の中心的な産業として、親から代々受け継がれてきた。この木炭の主原料は桤(かし)の木で、松阪、四日市、名古屋方面まで出荷されていた。窯に入れてから、炭になるまで1週間を要し、熱を冷まして窯出しまで10日間位要した。(写真⑧)
- ③石神(いしがみ)神社: 覆盆子橋を渡らずにそのまま数10m直進すると、石神神社(写真⑨)がある。(解説案内板「石神神社の由来」によると)元来、石神という地名で、石神を守護神として祀っている。ここを通る人は石神に安泰を祈っていたという。日清・日露・太平洋戦争の出征兵士を見送る別れの式はこの場所で行われ、石神に武運長久を祈願して見送った。

(以下の写真⑥～⑫の撮影: 2025年3月1日)



⑥高切間の石橋(石橋は右側)



⑦覆盆子橋(昭和38年3月架換)



⑧炭焼き窯(覆盆子橋を渡りすぐ左)



⑨石神神社



⑩覆盆子橋近くで上の道を進む(龍ヶ峠2.1km、久昌寺0.8km)

⑪砂防ダムを過ぎてアスファルト舗装の道ではなく、なるが歩くには十分広い



- ④広口(ひろぐち): 写真⑬、久昌寺から1.3km地点、龍ヶ峠へ1.6km。広ノ谷への分かれ道があったことから、広口と呼ばれている。写真⑬の中央奥に見える橋を渡ると、高麗広に行く道があったが、今は荒れて通行不能。

- ⑤茶屋口(ちややぐち): 写真⑭、久昌寺から1.7km地点、龍ヶ峠へ1.2km。峠の登り口(写真⑯)であり、これから少し行くと、茶屋があった。軽自動車ならここまで来ることができる。数台分の駐車スペースもある。



⑫広口にある道標(龍ヶ峠1.6km、久昌寺1.3km)



⑬広口(中央奥に分かれ道が見える)



⑭茶屋口にある解説案内板



⑮茶屋口にある道標(龍ヶ峠1.2km、久昌寺1.7km)



⑯茶屋口から峠への登り口



⑰隠れ岩

⑥六ヶ谷(ろくがだに)の伝説と隠れ岩: 覆盆子谷(ふぼんじだに/いちごだに、一字郷谷)に平家の残党がいることを聞きつけた源氏の追っ手は宇治(内宮のある地域)から龍ヶ峠を登ってきた。このことを知った落武者たちはこの谷や隠れ岩で待ち伏せし、源氏の追っ手6人を討ち取ったことから、この谷は六ヶ谷と呼ばれるようになった。隠れ岩は地上から出ている部分でも高さ4m以上あると思われる(写真⑰)。

⑦茶屋跡: かつてこの辺りには峠を越える旅人の休憩場として、茶屋があり、団子などの食べ物、飲み物、わらじなどを売っていたといわれている。茶屋の人たちは店を営む傍ら、周辺の田畑で仕事をしていた。あたりに石垣(写真⑱)が多く残っていて、当時の人々の生活のあとが偲ばれる。



⑱茶屋跡近くの石垣



⑲茶屋跡



⑳龍ヶ橋(辰ヶ橋): 木製



㉑龍ヶ峠まで0.5km



㉒峠まであと0.5kmの道



㉓冬桜: 龍ヶ峠頂上付近、2011年12月に植えられた。(2025年3月1日)花が数輪残っていた。



㉔龍ヶ峠頂上(標高333m)



㉕頂上にある東屋



㉖頂上から五ヶ所方面を望む

⑧龍ヶ峠頂上：標高333m。頂上には東屋(あずまや、写真⑮)がある。また、方位盤(写真⑲)もある。前述のように、「伊勢古道」の龍ヶ峠から内宮方面の宮域林側(北側)の区間は、山道の破損のため、残念ながら現在は通行止めになっている。ここから西1.8kmにある鷲嶺(しゅうれい、写真⑳、参考⑤)に行くことができる。



㉗龍ヶ峠頂上にある道標
久昌寺2.9km、内宮・宇治橋5.9km



㉘龍ヶ峠頂上にある道標
鷲嶺まで1.8km



㉙方位盤：東屋近くにある



㉚「従是神宮宮域」：「これより神宮宮域」を示す境界標(境界石)



㉛頂上北側：現在、通行止めの街道



㉜土地の境界を示す古い境界標：頂上の東側にある

⑨馬落とし：(写真③③、資料1のDVDによる)藤の蔓(つる)を張り、内宮側から登ってきた源氏の追っ手の馬を谷に落としたといわれている場所。宮域林側にあり、峠道では狭くて急峻なところである。**(現在は通行止めで行くことができない。)**

⑩待合い岩：(写真③④、資料1のDVDによる)(龍ヶ峠—仙人下橋の途中にある)待合い岩で市があった。南伊勢や一宇郷の産物と山田(今の伊勢市)の品を物々交換した。また、見合いの場所でもあったといわれている。**(現在は通行止めで行くことができない。)**



㉝馬落とし(資料1DVDより)



㉞待合い岩(資料1DVDより)

2 久昌寺と平 知盛

(より詳しい解説は沼木まちづくり協議会「久昌寺と平知盛」(資料11)を参照)

知盛山(ちせいざん)久昌寺(曹洞宗)は伊勢市矢持町菖蒲にある。寺伝によると、久昌寺は建久元年(1190年)に平知盛によって創建されたと伝えられている(資料12)。本尊は阿弥陀如来立像(あみだによらいりゅうどう)である。阿弥陀如来は極楽浄土から迎えに来るとされている。

平知盛は平安時代末期の平家一門の武将である。平知盛(1152年～1185年)は清盛の四男で、母は平時子である。平家は源氏との「壇ノ浦の戦い」(現在の山口県下関市)で敗れ、滅びた(1185年)。

久昌寺は平知盛の菩提(ぼだい)を弔(とむら)っている。本堂の後には墓があり、平知盛と一族の墓と伝えられている。

本尊の「木造阿弥陀如来立像」:像の高さ97.3cm、木造(ひのき)、寄木造(よせぎづくり)、漆箔(しっぽく、漆(うるし)を塗り金箔を押す技法)、彫眼(ちようがん)、眉間に木製の白毫(びやくごう)、頭は螺髪(らほつ)、頭頂は肉が盛り上がった肉髻(につけい)とその正面の根元には木製(赤色)の肉髻珠(につけいしゅ)。上品下生(じょうぼんげしょう)の来迎印(らいごういん、阿弥陀如来特有の印相で、阿弥陀仏が西方極楽浄土から臨終の人を迎えに来るときの印相)を結ぶ。

胎内墨書銘によると、仏師は僧でもある幸賢(こうけん)で、1221年制作(資料13)。木造阿弥陀如来立像は昭和31年(1956年)に国の重要文化財に指定された。



③⑤木造阿弥陀如来立像

3 覆盆子洞(いちごどう／ふぼんじどう)

覆盆子洞は久昌寺から伊勢古道で龍ヶ峠への道を通り、途中で覆盆子橋を渡る。ここから車で約5分(約800m)、行き止まりになる。さらに山中を沢伝いに左側を約10分歩く。久昌寺から徒歩約1.7km、海拔約300m地点。

平家の落武者が隠れる場所として覆盆子洞を使ったという伝説(資料14)がある。源氏の武士たちが平家の落武者を探して、五十鈴川を廻って、龍ヶ峠から菖蒲の地に入ろうとしたところを、平家の見張りの者が発見し、部落の人々に危険な状況を伝えた。そして、老人・女・こどもを覆盆子洞に入れて守った。

「覆盆子洞」は1968年に三重県天然記念物に指定された。資料11により詳しい解説がある。



③⑥覆盆子洞

4 鷲嶺観音(しゅうれいかんのん)

平知盛が鷲嶺(548m)(参考⑤)の山頂近くに鷲嶺観音を祀ったと伝えられている。鷲嶺山頂から100m強の地点にある。この観音は、壇ノ浦に向かって建てられて、敗れた平氏の冥福を祈っていると伝えられている。

参考

参考①:宮域林:(以下、資料15による)神宮林は一般的な名称で、伊勢神宮は宮域林(きゅういきりん)と呼ぶ。宮域林は五十鈴川上流にあり、全体で約5500ha。第1回式年遷宮(690年)から遷宮用の造営用材のための「御杣山」(みそまやま)と定められてきた。しかし、良質の檜(ひのき)が採れなくなり、鎌倉時代後期から美濃など、さらに江戸時代中期から木曽から供給されてきた。現在は200年計画で宮域林から造営用材を供給できるように、檜を育てている。62回目の遷宮では、間伐材ではあるが、宮域林から約700年ぶりに造営用材の一部を供給できた。

参考②: 神路山: 隣の島路山(しまじやま)と同様に特別な山頂を表すわけではない。島路山とともに宮域林を構成する。

参考③: 菖蒲川: 西五十鈴川とも呼ばれる。久昌寺付近で横輪川に合流する。覆盆子(ふぼんじ)橋より少し上流に砂防ダムがあり、川沿いの道路はそこまでアスファルト舗装されている(砂防ダム工事のために道路がアスファルト舗装されたと聞いた)。

参考④: 野面(のづら)積み: 自然石をそのまま積み上げる方法。小さな谷や水路を渡る昔の橋は、この野面橋が多い。城の石垣にも使われ、鎌倉時代末期に始められた。排水性が良く、頑丈で地震にも強い。

参考⑤: 鷲嶺: 外宮(げくう)のほぼ南約7kmに位置し、高さ548m。伊勢市では、朝熊山(あさまやま)に次いで2番目の高さである。袴腰山(はかまこしやま)とも呼ばれる。鷲嶺は吉川英治の小説『宮本武蔵』で、武蔵が修業した山として有名である。

参考資料

- 1) 『伊勢古道』、A4 4ページのリーフレット、平成21年(2009年)12月、(財団法人 伊勢志摩国立公園協会)。10分42秒のDVDを含む。菖蒲(久昌寺)－龍ヶ峠－高麗広－内宮のルートを「伊勢古道」と命名した。現在(2025年3月)通行止めの龍ヶ峠－高麗広の区間も含め、映像で紹介。
- 2) 伊勢市 解説案内板「龍ヶ峠伝説と歴史」。久昌寺の近くにある。
- 3) 覆盆子村(いちごむら) 中津八兵衛 『中津家由緒書』、寛永11年(1634年)、(久昌寺蔵)。
- 4) 南勢町誌編集委員会 『南勢町誌』、上巻、第3編 歴史、第7章 室町時代、p.188-189、(三重県度会郡南勢町)。
- 5) 中瀬誠一 「伊勢参宮 龍ヶ峠越えについて」、『いせ老連』、令和3年(2021年)1月、第83号、(伊勢市老人クラブ連合会)。
- 6) 「龍ヶ峠」、『沼木村(誌)』、巻十六、六十六、(沼木村役場)。巻十六は現在、伊勢市円座町の米山家が所蔵している(巻十八も所蔵)。大正時代に編纂されたと思われるが、内容は江戸時代や明治時代の文書を転記したものも含む。巻十六は紙焼けした褐色の部分(明治時代と思われる)と余り紙焼けしていない大正時代に作成された部分とが順ではなく混在した形で編集されている。「三麦(さんじ)図解」は江戸時代、または明治時代に書かれたものを転記したと思われる。出典については、三重県立図書館に調査依頼を行ったが、三重県立図書館の所蔵資料では残念ながら見つかることができなかった。三重県立図書館のスタッフの方々、ありがとうございました。「麦」(じ、事の異体字)はここでは麦ではなく、上に古、下に又が使われている。
- 7) 「龍ヶ峠」(公益社団法人 伊勢市観光協会)、<https://ise-kanko.jp/>、(参照2025-2-26)
- 8) 沼木まちづくり協議会 「11. 飯盛寺跡」、沼木の名所、(沼木まちづくり協議会)、<https://numakijin.com>。
- 9) 「曹洞宗と龍神信仰－その宗教的表裏の世界」、(仏教企画)、<https://www.bukkyo-kikaku.com>、(参照2025-2-28)
- 10) 『伊勢参宮名所図会』、巻之四、四十七、寛政2年(1797年)。8冊からなる伊勢神宮参拝のガイドブック。
- 11) 沼木まちづくり協議会 「久昌寺と平知盛」、2024年1月、(沼木まちづくり協議会)、<https://numakijin.com>。
- 12) 伊勢市教育委員会 解説案内板「久昌寺」、平成29年(2017年)3月設置。久昌寺の前にある。久昌寺は建久元年(1190年)に知盛の創建とあるが、久昌寺檀家総代の中瀬誠一氏は知盛の子孫によって1190年よりもっと後に創建されたと考えている。
- 13) 「木造阿弥陀如来立像」、文化財データベース、重要文化財、(三重県)、<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp>、(参照2023-09-25)
- 14) 解説案内板「覆盆子洞 伝説」。覆盆子洞の近くに設置。覆盆子洞は三重県の天然記念物に指定されているので、三重県が解説案内板を設置したと考えられる。
- 15) 「永遠の森」、『式年遷宮』、(伊勢神宮)、<https://www.isejingu.or.jp>、(参照2025-2-27)

謝辞

この解説を書くにあたり、資料などの提供・説明などで久昌寺檀家総代の中瀬誠一氏に大変お世話になりました。深く感謝いたします。また、資料の提供・助言などをしていただいた沼木まちづくり協議会のスタッフの皆さん、ありがとうございました。

作成責任者: 沼木まちづくり協議会 立花和也

改訂版(第3版) 2025年8月2日

「沼木まちづくり協議会」
〒516-1104 三重県伊勢市上野町823 TEL: 0596-39-7240
メールアドレス: info@numakijin.com ホームページ: <https://numakijin.com>